

だ未熟だとか後に聞かされたが、真偽のほどはわからない。

とにかく一人一人名前を呼ばれて日本船の舷をまたぐまで後髪を引かれる思いで、舷をまたぎ船に乗り移って、初めて安堵したものだ。

そして船員諸士に深々と頭を下げた。船員も「長い間ご苦労さまでした」と一人一人に頭を下げていた。

これで行くやうやく四年間の留置生活ともお別れだと思つと、何かしらわけのわからぬ涙が込み上げてきて抑えられなかつた。

ナホトカを出帆したのは十五日夕方だつたと思つが、夜半ごろまで南下したが、日本海に低気圧が北上しているのナホトカに引き返すということで船は北上した。ナホトカで何日間か停泊していたのだろうか、再び出港。七月二十日朝方「日本が見えたぞう」の聲に皆一勢に船上に出て、「鉄のカーテンのソ連で働かされて銃殺される」と考えていたのが我が日本に帰つて来たのだ、懐かしく、朝もやの中からうつつすらと山が浮かび、だんだん緑色に変化して来た。船員から「何

時何分ごろ舞鶴港に入港します。ただいま何時何分です」と報じられたが、だれも船内に入る者はいない。

だんだん近づいて来る故国を見張っている。みな一人一人感無量のものがあつたろうと思つ。

湾口を入ってからややしばらくかかつても港に着かない。随分奥深い湾だなあ、さすが軍港だけあるなあとと思つた。

やがて上陸が開始され、波止場は出迎えの人々でこつたがえしていた。しかし自分が知っている人は一人もいなかつた。

## シベリア抑留の思い出

新潟県 加藤 新三郎

終戦になる年三月末に日支事変に次いで、二度目の召集で新発田留守隊に虎部隊として七百三十三人が入隊した。間もなく朝鮮羅南へ、次いで鮮清国境の演習のもとに壕を掘って陣地構築中の山中で、八月十七日

夕方、初めて終戦を知った。みんな愕然として翌日囪  
們で武装解除、次いで満州間島へ連行され、その上さ  
らに長い行軍の後にソ連領へ入り、しばらく天幕露營  
をさせられた。後に貨車輸送でコムソモリスク地区へ  
連行されて、以来帰国までの足かけ四年の間、極寒の  
地での労働作業だった。

冬は零下三十度以上のときには待機命令が出る。太  
陽が顔を出すのは十時ころで、それでようやく気温が  
上がってくると作業整列で、また夕方日の暮れるのも  
早い。主として土方仕事で建築基礎工事の壕を幅八十  
センチの深さ百二十センチくらいを掘るのだが、カチ  
ンカチンに凍ってツルハシも受け付けず一センチ二セ  
ンチを掘るのがせいぜいで、夕方には両腕が痛くなっ  
て手も上げられないほどだ。全くノルマが上がらない  
こともあった。たしかこんなこともあった。五月の中  
ころだと思うが、監視員の隙を見つけてタラップに使  
う敷き板を手早くツルハシで割って壕の中でたき火を  
した。凍った土をやわらげて掘り進んで、長さ二メー  
トルの壕を掘って、ようやくノルマを達成したのだ。

また、毎日の食事は作業の達成ぐあいのノルマ食で、  
作業を百パーセント達成しなければ、満杯のノルマ食  
は食べられない。自分はいつも八〇%食だったようだ。  
食事は炊事で三時間以上炊いて、軍医の検査が済んで  
初めて食事が出される。自分はまた丈夫でないので、  
冬のシベリアは二年目と三年目は月例検査で女軍医中  
尉にオーカ、イッシュョアデハイドーマと言われた。休  
息の家で三週くらいの休養で体力を回復しては、原隊  
へ戻され作業をさせられたものだった。また初めての  
冬に風邪を引いて三十九度五分もの熱を出し診察を受  
けたら、今日のところは病室が満員だから、明日診察  
にくるようにと言われた。内地であれば三十九度五分  
もの高熱なら、肺炎になるのを心配して大騒ぎであろ  
うにと思い、この非情な扱いに憤慨し、がっかりした。  
それでもその晩は同僚の不寝番がかわるがわる額を冷  
やしてくれて助かった。翌朝再び診察を受けに行った  
ら、まず頭髮やその他の毛をバリカンで刈られた。蒸  
気機関車でわかした湯を一斗だるにもらって全身を洗  
ってから診察を受け、すぐ入室が決まったが、お前の

場所は今死人を片づけるから待っていると云われた。翌日、日本の軍医が診察して急性肺炎だと言われ、重症人の場所へ移されることになったが、ここも昨日のように死んだ人を始末してからだと言われ、目の前の死人を眺めながら自分もあのようになるのではないかと、全く心細かった。が、幸いにも隣の人が急性肺炎だったが、快方に向かつて元気になっていて、「私は元衛生兵だ、大丈夫私が見てやるから」と言われて、室外は出れないが、急造の便所の屋根の板囲い裏にづく水をバタ缶十二オンス入れに引っかけてきては、私の額を冷やしてくれたので、幸いにも死を脱した。また別の場所に移されたが軍医は、お前は静かに寝ていなさい。そうすれば自然に治るのだからと言われ、薬も与えられない状態で、捕虜とは全く惨めなものをつくづく骨身にしみた。

やがて二十三日の入室で一まず退院して、軽い作業につかされたのであった。

さて、今一つは、忘れもしない昭和二十三年六月十一日に、雨あがりの作業で二階で同僚と二人で下から

ウインチで上がってくる松丸太六メートル物の梁（はり）を運搬していた。たまたま一回り大きいのを担いで相棒が前で私が後ろで目的の場所まで行き、一、二、三の掛け声とともにまさに右側へ投げおろそうとしたときに、私の左足がズラッと滑った。投げる寸前に右方から滑り落ちてポキンと音がして右足下腿骨折し、ソ連の監督にヤボンスキーヨッポイマチ、ヨッポイマチとどなられたが、結果として仕方ないことだった。間もなく病院に運ばれて入院したが、翌日になったら骨折した向こうすねに大きな水泡ができた。一週間くらいで水泡も治ったので、女軍医中尉の手で包帯石膏を巻いたが、緩いので石膏が乾いても痛くて歩けない。病棟長の少佐の巡視の折りに説明したら、早速やり直したと言われて、再び包帯石膏の巻き直しにかかった。が、何しろ骨折以来三週間で、前に石膏を巻いて二週間余りも日がたっていたので、骨折箇所肉が付き始めていた。石膏を巻くのに五人がかりで頭と両手両足をしっかりと押さえつけ、特に右足を日本の軍医に力いっぱい引つ張られ余りの痛さに大つぶの涙が出た。

軍医が引つ張つて正常な位置に直して、女軍医中尉がしっかりと丁寧に包帯石膏を十一本も巻いてくれた。今度は最初のときと違つて石膏が乾燥した後、松葉杖で突いて歩けるようになった。

石膏を巻いて三十三日の朝、女軍医中尉に呼び出されて、ヤボンスキー杖なしに歩いてみよと言われて歩いた。まだ少し痛いといったが、ハラシヨウハラシヨウ、イッシヨ東京ダモイだと言われた。石膏を切つてもらつたが足がブラブラして歩けない。一本杖で練習して歩くようにと言われた。

五日目に貨車がきたので、翌朝出発はトラックで車送りとなつた。貨車に着いて、乗車には地上七、八尺もあるのではしごで後ろ向きになりお尻と左足で、一けた一けた上つて乗車した。

四日目にナホトカに着き、病院船帰国となり、待機していた。なかなか船が来ないので、一般船に切り替わり第三分所を通つて港まで車送りとなつて、一人ずつ点呼をして乗船した。遠州丸の甲板上に立つたときは万感こもこも胸迫る思いであつた。

顧みれば、終戦後シベリアに連行されてさまざまな苦難を味わつたが、不思議に命を長らえて、しっかりと故国の大地を歩みしめて故郷へ帰り、親、妻子のもとに帰れた感激は、今も忘れられない。

## 抑留生活回顧

北海道 奈良勝正

昭和二十年十月二十六日、昼近く我々の乗つた船は、ソ連兵が北海道とだました沿海州ワニノ港に接岸した。あたりの山は見渡す限り焼け野原で、焼けぼくいが点在していた。ソ連兵いわく、戦前に無人に近いこの地に日本人が船でやつて来、盗伐の限りを欲しいままにして、あとは証拠隠滅に火を放つたと話していた。海はフヨールド状を形成しかなり水深があり、ここは潜水艦の基地でもあろうか、車のエンジン音に似た音を発し、潜水艦が数隻航行していた。丘の上ではダイナマイトの破裂音がし、数人作業しているのが遠